

小春日和（こはるびより）

小春日和は秋の季語

「小春日和」は、春の言葉が使われており、春の穏やかな気候のように感じている人が多いのではないのでしょうか？
しかし、「小春日和」は秋の終わりから冬の始め頃(11月～12月)に掛けての、穏やかで暖かな気候を指す言葉です。

手紙やメールの季節の挨拶のうち「小春日和」を使ったものを送るのは11月と決められています。

なお、近年、春先でないことは理解した上で、陰暦10月頃(11月～12月上旬)に限らず、寒さの厳しい11月や2月に訪れる暖かな日についても「小春日和」を使う傾向が生じています。

「小こ」には、接頭語として名詞の上に付いて、「小石」「小雨」などのように、物事の量や程度の小ささを表す使い方があり、「小春」はそういった用法の周縁にあるものと言えるでしょう。

似た表現に「小こ江戸」があります。埼玉県川越市や千葉県香取市などが小江戸と呼ばれますが、もちろん、それらの土地は「江戸」そのものではなく、「江戸のように栄えた町」といった意味でそう言われています。「小春」という語だけを見れば「春そのものではないけれども春のような気候」と読み取れるでしょう。

小春日和の気象的背景

晩秋から初冬になるとシベリア内部の高気圧が発達し、冬型の気圧配置である西高東低となり、シベリアからの寒気によって北より冷たい風が吹き気温も低下していきます。

ですが、初冬にはシベリアからの寒気の勢力が弱まり、南西からの暖かい移動性高気圧が日本を覆うことがあり、この影響により穏やかな暖かい晴天が見られます。これを「小春日和」と呼びます。

「秋晴れ」というのは、秋の空が清々しく晴れわたっていることを言います。

この時期は三寒四温と言われるほど低気圧と移動性高気圧の入れ替わりがあり、天候も変わりやすくなります。低気圧の影響で雨が降り大気中のゴミなどが洗い流され、入れ替わりで高気圧が来ると空気が乾燥して澄み切った空気や空になることから「秋晴れ」と呼ばれます。

小春は陰暦10月の別称

春のように温暖な様子が「小春」と呼ばれ、それが陰暦の10月の別称としても使われるようになった。
陰暦10月は、現在で言うと、おおよそ11月から12月上旬に当たります。「日和」には「天候」「空模様」や「晴天」といった意味があります。

若者の半数は春先の言葉だと思っている

年配の方々は、小春日和が秋の季語であると知っている人が多いが、若者の半分ぐらいの人は春先の言葉だと思っている調査結果がある。

日本でいう「小春日和」はアメリカでは「indian summer」と呼ばれ、直訳すれば「インディアン」の夏」というものになります。

イギリスでは「小春日和」のことを「Saint Martin' summer」と呼びます。「聖マーティンの夏」とは、聖マーティンのお祭りの頃(11月11日頃)に訪れる穏やかで暖かい日のことをいうことからきています。

また「Saint Martin'」には「偽りの」という意味があることから、ぼかぼか陽気を表す小春日和は偽りの夏という意味で使われています。

ロシア

日本でいう「小春日和」はロシアでは「女の夏」と呼ばれています。ロシアやヨーロッパ、北米では春や秋より夏の方が過ごしやすいため、「女の夏」という表現をします。ではなぜ春や秋より夏の方が過ごしやすいかというと、緯度が関係しています。

ロシアの夏の最高気温は8月でも

春日和は春の季語